

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 21 日現在

機関番号：33936

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2016

課題番号：26861931

研究課題名(和文)硬膜外麻酔による無痛分娩を選択した女性への心理的ケアモデルの開発と試作

研究課題名(英文)The psychological caring model's development and making for trial purposes to woman who selects painless delivery by epidural anesthesia

研究代表者

星 貴江(HOSHI, Kie)

人間環境大学・看護学部・助教

研究者番号：80637728

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、硬膜外麻酔による無痛分娩を選択した女性のself-esteemおよび育児に関する調査を行い、心理的ケアモデルの開発と試作を行うことを目的とした。今回の調査からは、硬膜外麻酔による無痛分娩を選択した女性は、自尊感情の低下がなく、産後うつ傾向が低いことが示された。無痛分娩を希望した理由は様々であったが、出産に対する満足度が高く、それぞれ無痛分娩での出産を肯定的に評価し、価値あるものとし認識し、自己概念を再形成し育児を行っていたと考えられる。妊娠中からの無痛分娩希望者へのケア体制、サポート体制の把握、また出産における対象の個々の体験を大切に、支援していく必要性が示唆された。

研究成果の概要(英文)：The study aimed to do woman's self-esteem that selected the painless delivery by the epidural anesthesia and the investigation concerning the child care, and to do the psychological caring model's development and making for trial purposes. The woman who selected the painless delivery by the epidural anesthesia from this investigation got the tendency to strike after it had produced there was no decrease in the self-esteem, and low shown.

It is thought that the satisfaction rating to birth is high, birth by the painless delivery is affirmatively evaluated respectively, it is assumed the valuable one, recognizes, the self-concept is formed again, and of a child was taken care though the reason to hope for the painless delivery was various. The necessity for valuing an individual experience of the system of caring to the painless delivery applicant from the pregnancy, the grasp of the system of the support, and the object in birth, and support was suggested.

研究分野：助産学

キーワード：無痛分娩 助産ケア

1. 研究開始当初の背景

現在、女性の高学歴化が進み、就労率、労働意欲の上昇により女性のライフスタイルの変化により人生における結婚や育児の優先順位が低下し、女性の非婚化・晩婚化が指摘され、少子化が問題視されている(内閣府,2012)。そのような変化の中、女性にとって妊娠・出産はライフサイクルの中で貴重な体験であり、女性は自らの価値観や考えをもとに産み方や産む場所を選択する。

産科医療の1つである硬膜外麻酔による無痛分娩を選択し、出産・育児をしている女性たちがいる。無痛分娩は、薬剤により分娩時の疼痛を緩和あるいは除去し、できる限り無痛下に分娩を完了させるのを目的とした分娩法(日本産科婦人科学会編,2008)と定義されており、現在安全が確立されている麻酔法として、硬膜外麻酔による無痛分娩が主流となっている(天野,2009)。無痛分娩の適応は、妊産婦からの要望と医学的適応の2つに大別されている(角倉,2007)。

唯一公表されている日本における無痛分娩を実施している施設の調査では大学病院では57%、二次施設は22%、一次施設は40%(天野,2009)であり、診療所などの一次施設では、無痛分娩の実施率が増加しており、60%が産婦の希望にて無痛分娩を実施している現状(奥富,2002)がある。

しかし、医療現場では欧米諸国と比較すると日本では無痛分娩が浸透しておらず、その理由として人的不足、必要性がない、安全性に問題がある等があげられ(天野,2001)、そして特に日本には、元禄時代より「痛みを耐えかねるような女性は人を惑わせ、養生の道も守れないから悪い病気にもなってしまう。我慢が出来ないのは卑怯である」(櫻井,1998)という出産への言い伝えがあり、史上では語られ、陣痛に宗教的あるいは社会的な意味をもたせることに

より、陣痛に耐えそのことを美德とする文化的土壌がある。

また、妊婦のケアを行う助産師は従来、出産を女性の生理的現象としてうけとめ、自然な経過を尊重して薬剤などを使用せず関わることを基本とした業務を行ってきた。そのため、麻酔を使用した無痛分娩に対する助産師の意識は高いとは言い難い(濱,2006;三國,2005)。

よって、無痛分娩を選択する女性への助産ケアの充実を阻害しかねないと考えられる。

無痛分娩を選択した女性に対して、産科医療は確立されているが、助産師としてのケアの確立ができておらず、無痛分娩を選択した女性に関する研究は数少ない現状がある。

2. 研究の目的

本研究は、硬膜外麻酔による無痛分娩を選択した女性たちがネガティブな認識を抱くことがなく、妊娠・出産・育児が迎えられるために心理的ケアモデルの開発と試作を行うことを目的とした。

3. 研究の方法

本研究の研究方法は3つである。

1)硬膜外麻酔による無痛分娩を選択した女性の self-esteem に関する調査

2)硬膜外麻酔による無痛分娩を選択した女性の育児に関する調査

3)硬膜外麻酔による無痛分娩を選択した女性に対する心理的ケアモデルの開発と試作

1)・2)の研究では女性たちの self-esteem や無痛分娩の価値、育児に対して実態を量的・質的調査する。それらをまとめ、3)では女性たちへの心理的ケアモデルを作成し、意見を募り評価し、再度ケアモデルの作成を行った。

1)硬膜外麻酔による無痛分娩を選択した女性の self-esteem に関する調査

(1)目的：女性たちが硬膜外麻酔による無痛分娩を選択した自分自身をどのように認知し、評価しているのかを明らかにした。

(2)対象：硬膜外麻酔による無痛分娩を実施しているクリニックにて、硬膜外麻酔による無痛分娩を希望した妊娠・分娩・産褥経過に異常がない褥婦(量的研究：100名、質的研究：7名程度とした)

(3)研究期間：2013年6月～2015年8月までである。

(4)調査方法：出産直後、出産後1か月、出産後3～4か月と計3回の時点で縦断的に調査を行った。

時期の設定は、多くの母親は、産後2～3日頃に出産を想起しながら、出産体験を統合し意味づけを行い(Rubin1984/1997)、子どもの誕生とともに子どもとの位置関係や母親としての自己に対する位置関係が大きく変わる(Rubin1984/1997)といわれている。また、出産後最初の1か月に母親としての自己を確認し、子どもの母親であることへと移行し(Rubin1984/1997)、そして産後4か月頃、出産した女性たちは母親役割の達成の時期となる(Mercer1985.2004)といわれている。これらのことを踏まえ、産後3～4日(産褥入院中)、産後1か月頃、産後4か月頃に調査を行った。

産褥入院中に同意をとり、質問紙の回答が得られた者に対して産後1ヵ月後、産後3～4ヵ月後は郵送にて調査を行った。

(5)研究デザイン：量的研究と質的記述研究のトライアングレーションにて行った。質問紙調査では、分析には統計解析プログラムパッケージ SPSS ver.23 を用いた。

インタビュー調査では、インタビューは IC レコーダーに記録し逐語録を作成した。逐語録は類似性をもとにサブカテゴリ、カテゴリの抽出し質的帰納的に分析を行った。

量的調査

< 調査項目 >

- ・対象の属性：年齢、初経産、最終学歴等
- ・無痛分娩に関する事項：無痛分娩を希望した時期・理由、満足度、次回出産方法の希望等

- ・母体の情報：分娩所要時間(分娩第1期・第2期・第3期)、分娩時の状況、出血量等
- ・児の情報：体重、身長、児のアプガールスコア、臍帯血ガス等

- ・状態自尊感情尺度：Rosenberg(1965)の自尊感情尺度(山本,1982)をもとに阿部ら(2007)にてよって開発された。普段ではなく、「今の自分」の考えていることを測るものであり、その時点での状況に対応して変動するといった特徴を持ち、妥当性が証明されている。9項目から構成され、5件法の自己記入式質問票である。逆転項目を処理し、全項目への回答の合計を分析に使用した。

質的調査

インタビューガイドを作成し、女性たちが硬膜外麻酔による無痛分娩を選択した自分自身をどのように認知し、評価しているのか出産後、産後1ヵ月、3～4ヵ月後に半構造面接法でインタビューを行った。

2)硬膜外麻酔による無痛分娩を選択した女性の育児に関する調査

(1)目的：硬膜外麻酔による無痛分娩を選択し出産をした女性たちが、出産後どのような思いで育児を行っているのかを明らかにした。

(2)対象：硬膜外麻酔による無痛分娩を実施しているクリニックにて、硬膜外麻酔

による無痛分娩を希望した妊娠・分娩・産褥経過に異常がない褥婦(量的研究：100名、質的研究：7名程度とした)

(3)研究期間：2013年6月～2015年8月までである。

(4)調査方法：出産後、産後3・4日目、産後1ヶ月、産後3・4ヶ月に縦断的自記式質問紙およびインタビューにてデータ収集を行った。

(5)研究デザイン：量的研究と質的記述研究のトライアングレーションにて行った。質問紙調査では、分析には統計解析プログラムパッケージSPSS ver.23を用いた。インタビュー調査では、インタビューはICレコーダーに記録し逐語録を作成した。逐語録は類似性をもとにサブカテゴリ、カテゴリの抽出し質的帰納的に分析を行った。

量的調査

<調査項目>

・育児の状況：児への栄養方法、サポート
・エジンバラ産後うつ病質問票(EPDS)：Coxらによって1987年に英国で開発された産後の母親の抑うつ状態を定量的に評価することを目的とした尺度である。日本語版は岡野によって作成され信頼性、妥当性ともに検証されている

10項目で0～3点の4件法の自己記入式質問票である。合計点が0から30点満点であり、日本では9点以上をうつ病としてスクリーニングしている(岡野,1996)。

・赤ちゃんへの気持ち質問票：育児の負担や赤ちゃんへの様々な気持ちの評価を行う尺度である。

10項目で0～3点の4件法の自己記入式質問票である。合計点数は30点満点であり、得点が高いほど、赤ちゃんへの否定的な感情が強いことを示している(鈴宮,2003)。

質的調査

インタビューガイドを作成し、硬膜外麻酔による無痛分娩を選択し出産した女性が、どのような思いで育児を行っているのか出産後、産後1ヵ月、3～4ヵ月後に半構造面接法でインタビューを行った。

3)硬膜外麻酔による無痛分娩を選択した女性に対する心理的ケアモデルの開発と試作

1)、2)の研究結果をもとに、対象者の特性を抽出し、心理的ケアモデルの基盤となる概念・手順を記述した検討をした。

上記1)2)3)の研究は、研究者の所属する大学倫理委員会の審査を受け承認を受け実施した。また、研究施設長及び研究対象者には研究の主旨、自由意思であること、途中辞退の際の権利について説明、不利益を被らないこと、個人が特定できないように配慮することを口頭と文書にて説明した。

4. 研究成果

1)硬膜外麻酔による無痛分娩を選択した女性のself-esteemに関する調査

(1) 研究対象

研究対象者は、研究協力3施設で硬膜外麻酔による無痛分娩にて出産した産後2日目～4日目の褥婦170名である。出産直後、出産後1か月、出産後3か月の縦断調査であり、1回目の質問紙を136名(回収率80%)から回答があり、出産後1か月後に追跡可能な対象者に2回目の質問紙を郵送にて送付し108名(回収率79.4%)回答があり、3回目も同様に質問紙を送付し最終88名(回収率81.5%)の回答が得られた。無回答や記入もれのデータは無効とし、有効回答数は79名(有効回答率89.8%)であり、79名を分析対象とした。

そのうち、7名を質的調査の対象とし

た。

(2)対象の基本属性(表 1)

初経産別では初産婦 52 名(65.8%)、経産婦 27 名(34.2%)であった。経産婦の内訳は 1 経産婦 19 名、2 経産婦 8 名であった。

年齢は 20 代が 21 名(26.1%)、30 代は 55 名(61.1%)、40 代前半は 3 名(3.8%)であった。最終学歴は、高校・専門学校は 16 名(20.3%)、短期大学は 11 名(13.9%)、大学以上は 51 名(64.6%)であった。

表 1. 対象者の基本属性 n = 79

初経産別		
初産婦	52	(65.8%)
経産婦	27	(34.2%)
1 経産婦	19	
2 経産婦	8	
年齢		
20 代	21	(26.6%)
30 代	55	(61.1%)
40 代	3	(3.8%)
最終学歴		
高校・専門学校	16	(20.3%)
短期大学	11	(13.9%)
大学以上	51	(64.6%)

(3)分娩時の状況

出産時妊娠週数は妊娠 39W5D ± 1 W4D、分娩第 1 期所要時間は 10 時間 27 分 ± 6 時間 48 分、分娩第 2 期所要時間 1 時間 5 分 ± 56 分、麻酔希望時陣痛周期 3.7 ± 3.4 分、麻酔～児娩出時間 5 時間 ± 4 時間 46 分であった。

分娩方法は 16 名(20.2%)が吸引・鉗子分娩の器械分娩であり、陣痛誘発・促進剤の使用は 47 名(60.7%)であった。

児の体重 3061g ± 356g、アプガール 1 分値 8.9 ± 0.7 点、アプガール 5 分値 9.9 ± 0.4 点、臍帯血 PH6.9 ± 1.6、BE11.8

± 35.4mEq/L、臍帯血 PCO₂ は 49.8 ± 14.8 mmHg、臍帯血 PO₂ は 15.7 ± 6.5 mmHg であった。

(4)無痛分娩に関する事項

無痛分娩を希望した理由は、痛みへの回避 55 名(26.2%)、産後早期の身体回復 45 名(21.4%)、陣痛への不安 39 名(18.6%)、陣痛への恐怖 30 名(14.3%)、自分への不安 12 名(5.7%)、友達の勧め 12 名(5.7%)、安楽の保証 5 名(2.4%)、その他 12 名(5.7%)であり理由は様々であった。無痛分娩での出産体験を満足しているものは 73 名(92.4%)、不満足 6 名(7.8%)であり、また次回の出産方法の希望は、無痛分娩 64 名(81.0%)、自然分娩 2 名(2.5%)、わからない 13 名(16.5%)であり、満足感が高いことがいえる。

(5)状態自尊感情尺度

出産直後は平均 37.71 ± 6.65、出産 1 カ月後は 38.47 ± 6.53、3-4 か月後は 38.89 ± 6.65 であった。初経産別にみると、有意な差はなかった。

(6)質的調査

女性たちは、「陣痛の痛みからの解放」、「夫や家族の承認」、「心理的余裕」、「子どもの健康」等を無痛分娩での体験で得て、出産体験の肯定的評価を高めていた。また「陣痛体験から罪悪感を払拭」し、「子どもへの愛情を自らの体験より実証」し、自分自身の出産方法の選択が間違いなかったという確信を得ていたことが示された。

2)硬膜外麻酔による無痛分娩を選択した女性の育児に関する調査

(1)育児に関する事項

児への栄養方法は、出産直後では母乳栄養は 26 名(32.9%)、混合栄養は 51 名(64.6%)、人工栄養は 2 名(2.5%)であった。1 か月後は、母乳栄養は 45 名(57.0%)、

混合栄養は 34 名(43.0%)であった。3~4 か月後は、母乳栄養は 54 名(68.4%)、混合栄養は 22 名(27.8%)、人工栄養は 3 名(3.8%)であった。日本の栄養法別割合(2015)と比べ、産後 1 ヶ月、3~4 か月の母乳栄養の割合が高かった。

(2) エジンバラ産後うつ病質問票(EPDS)

EPDS は、出産直後は、平均 4.05 ± 3.71 点であり、1 ヶ月後は平均 3.53 ± 3.78 点であり、3-4 か月後は平均 2.46 ± 2.60 点であった。初経産別にみると、有意な差はなかった。

産後うつ病のスクリーニングで高値とされる 9 点以上は、出産直後は 11 名(13.9%)、1 ヶ月後は 4 名(5.1%)、3-4 ヶ月後は 4 名(5.1%)であった。うつ傾向の割合の全国平均は 10~15%(吉田,2001)であり、今回の対象者は低い傾向にあった。

9 点以上の高値 11 名の比較を行ったが、属性や分娩状況等から有意な因子は抽出されなかった。

(3) 赤ちゃんへの気持ち質問票

出産直後は平均 1.91 ± 2.24 点、1 ヶ月後は 1.48 ± 1.82 点であり、3-4 か月後は 1.04 ± 1.65 点であった。

(4) 質的調査

出産方法にかかわらず「日々目の前の子どもの育児に順応」し、「子どもの母親としての役割」を果たしていたことが示された。

1)、2)のまとめ

今回の研究対象者は、self-esteem の低下がなく、産後うつ傾向が低値であった。無痛分娩を希望した理由は様々であったが、量的質的調査からも出産に対する満足度が高く、それぞれ無痛分娩での出産を肯定的に評価し、価値あるものとし認識し、自己概念を再形成し育児を行っていたと考えられる。

3) 硬膜外麻酔による無痛分娩を選択した女性に対する心理的ケアモデルの開発と試作

1)、2)の研究結果をもとに、心理的ケアモデルの検討を目的に、無痛分娩に関わる助産師 4 名にフォーカスグループインタビューを行った。

妊娠中からの無痛分娩希望者へのケア体制、サポート体制の把握、また出産における対象の個々の体験を大切にし、支援していく必要性が示唆された。

5 . 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 0 件)

〔学会発表〕(計 0 件)

〔図書〕 (計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況 (計 0 件)

取得状況(計 0 件)

〔その他〕

ホームページ等

6 . 研究組織

(1) 研究代表者

星 貴江(HOSHI, Kie)

人間環境大学看護学部 助教

研究者番号：80637728

(2) 研究分担者

該当なし

(3) 連携研究者

該当なし

(4) 研究協力者

該当なし